

woman たらす



絣

(山形県)

絣は遠くインドから島伝いに沖縄にたどり着き、日本列島を北上。最上川をさかのぼって、絣の北限とされる山形県置賜地方まで伝わりました。この地方の長井市、白鷹町では、明治に入って外から技術者を招いて絣の生産を始めました。現在もそれぞれ特徴的な絣を作り続けて

「北限」に精緻な技法

います。

長井絣を代表するのが米琉絣。沖縄の琉球絣に似ていることが名前の由来です。大きな幾何学模様が特徴で、最盛期の大正時代は赤や紫などの派手な模様も織られました。長井は最上川舟運の主要な川港であり、華やかな絣は酒田に運ばれた後、大阪や京都にも出荷されたといっています。

やがてシンプルでモダンな柄に変化しましたが、今も糸を染色する際は模様となる部分を糸でくくって防染する結び絣の技法が使われています。

一方、長井より北に奥まった白鷹は、板締という染色技法を用いたとても精緻な模様が特徴です。板締は、表面に細い溝を掘った板に糸を巻き付けたもの

を30~50枚重ねて締め、染料をかけて染め上げる技法。染色に適した温度や湿度の見極めはもとより、板の締め方や糸の撚り具合、染料をかけるタイミングは、長年の経験と勘による難しい作業となります。

写真右側が板締小絣。わずかな数ミリの文様が正確に並んでいるのは板締だからこそ。ほかの産地が別の技法に切り替わる中、山里の白鷹だけが取り残されるように板締の技法を守ってきました。

手の込んだ技法を守る北限の絣。異国の文様が山あいの里にたどり着き、先人たちが東北の絣として作り上げてきた貴重な染め織物を、なんとかして残していきたいものです。

(田中陽子・「暮らしのクラ



白鷹の板締小絣(右)
と長井の米琉絣

フトゆずりは」店主)

〈第4金曜日掲載〉